

『十批判書』と『先秦諸子繫年』に関する論争

疋 田 啓 佑

(一)

昨年の『中国史研究』（第三期）に、翟清福・耿清珩の共著による「一桩学術公案的真相」という論文が出た。これは今からもう42年も昔になるが、香港で刊行されている『人生』という雑誌に掲載された余英時（現在・プリンストン大学教授）氏の論文「郭沫若抄襲錢穆著作考——『十批判書』与『先秦諸子繫年』互校記」についてのもので、新進気鋭の研究者として世に躍り出た頃の余英時氏の論文である。それにしろ42年も前の論文について何を今さらという気がするが、近年、余英時氏がこれをまた「郭沫若抄襲錢穆先生著作考」という一文を、一九九一年、錢穆を記

念して出版した『猶記風水土鱗』という本に上記の論文を、前の標題を改めて、副題であった「『十批判書』与『先秦諸子繫年』互校記」とし、内容も少し行きすぎた表現のあるところは削除したが、全体の内容はほぼ昔の通りのものを掲載した。

何故このような挙に出たかというと、最初発表した一九五四年当時は、大陸中国と香港や台湾など西側の国との関係は隔絶していて、何らこの強烈な論文に対して反応がなかったからである。そこで三十七年後であるが、恩師錢穆先生の亡くなった一九九〇年の翌年、先生を記念して出版した本に投稿したのである。

これだけに嫌りなかった余英時氏は、一九九二年に、香

港で『明報月刊』十月号に「談郭沫若的古史研究」を發表して、再度郭沫若は錢穆の研究を剽窃した「嚴重的抄襲罪」を犯していると訴え、更に一九九四年に前述の「互校記」を『錢穆和中国文化』（上海遠東出版社刊）に収めた。

この再三の余英時の抗議の論文に対して、予想通り上海をはじめ大陸でも論議が巻き起った。上海一帯に影響の大きい一流新聞の『讀書周報』に「安迪」という署名による「一段公案」という短いものが載り、続いて『博覽群書』の一九九五年第十二期には、「丁東」という署名で「學術中不能承受之輕」という文が載った。この二人の作者は何ら調査や研究もせず余英時の言葉を繰り返して、郭沫若の剽窃をねじ曲げて論じていると翟清福・耿清珩は言う。彼らは、大陸上海から論じる時、郭沫若に何らかの弁護を期待していたのに、予想外であり、自然、余英時の希望に沿う内容であっただけに、翟・耿の二人は、より客觀的に、冷静に、この二人の書を比較検討したのが「一桩學術公案的真相」なのである。

そこで問題の書の著者について述べると、錢穆^{*1}（一八九五—一九九〇）、清の光緒二十一年七月三十日、江蘇省無錫県南門延祥郷で生れ、一九九〇年八月三十日、台北市杭州南路の家で没した。學業について言うと、七歳で入塾、十歳で新式小学校に入り、十二歳で常州府中学堂に入る。

十七歳の時、南京の私立鍾英中学に転じて学んでいる。民国元年の春、十八歳から約十年間、小学校の教師、校長として教育に従事、その傍ら古典を研究、特に宋明の儒學の研究を深めている。民国十一年（一九二二）から十九年にかけて、江蘇省立第三師範学校、蘇州中学等で教え、その間、『論語要略』『孟子要略』『国学概論』等の著作をしている。

ここで問題になっている『先秦諸子繫年』の中の論文も^{*2}民国十二年の秋から書き始めている。民国十九年、三十六歳の時、北京へ行き、それ以後八年間、北京で大学教授の生活をする。この間に『先秦諸子繫年』『中国近三百年學術史』を完成させた。特に『先秦諸子繫年』の初版は民国二十四年（一九三五）商務印書館より刊行されている。

この頃から抗戰時期に入り、北京大学から昆明の西南聯合大学へと移っていかざるを得なくなる。そのような中で著した『国史大綱』を境として錢穆の學問の傾向は分れる。前期のものは考証にもとづく歴史的な論文であったが、後期は思想・文化に関するものとなって中国文化の復興や中国と西欧との比較研究の方に向うが、ここに引きあげている『先秦諸子繫年』は前期の考証をもとにした研究の代表作である。

錢穆は一九四九年、大陸中国を逃れて香港へ行き、唐君

毅、牟宗三、徐復観らと新亜書院を創設した。そしてこの新亜書院の第一回生として卒業したのが余英時氏なのである。一九六七年からは台湾に居を移して、新儒学と中国文化の復興運動に参加し、彪大な著述を残した。

もう一方の郭沫若について述べるなら、

郭沫若（一八九二—一九七八）、四川省楽山県の人。商人の家に生れ、五歳で私塾に入り、一九〇六年から楽山県の高等小学校、嘉定府中学堂、成都高等学堂に学び、一九一一年から学生運動に参加、一九一三年、来日。一九一四年から一九二三年にかけて、まず東京の第一高等学校予科、岡山の第六高等学校、そして九州帝国大学医学部に学び、医学士となったが、後医学を放棄、日本の社会主義文学などの影響を受け、文学・思想の方面で活動、五・四運動に刺激されて詩を作る。のち『女神』として出版。上海に帰国してから歴史劇『卓文君』『王昭君』等を執筆、抗戦期に入るや、政治活動をする一方で、在日中から研究していた古代中国思想の研究も続けた。

郭沫若の学問的業績は、甲骨・金文の研究から中国古代思想まで数多くのものがある。特に中国古代思想研究の総まとめが『十批判書』であり、この続編ともいべきものが『青銅時代』である。後半には中国社会科学院長を務めたが文化大革命に際しては、過去の業績を自己批判して誤

りとするなど、政治の波浪に左右された。

『十批判書』について述べると、一九四五年九月、重慶で刊行したのが初版である。そして本書の成立事情と、その頃まで郭沫若の歩いた道は「後記」に、「私はどのようなにして『青銅時代』と『十批判書』を書いたか」に述べている。

『十批判書』は一九四五年初版のあと、一九五〇年に上海の羣益出版社から訂正本が出、これが岩波書店から訳出された本の底本であるが、一九五四年六月に北京の人民出版社から、そして五六年十月には科学出版社から刊行されている。なお科学出版社からは姉妹篇ともいべき『青銅時代』（一九五七年）そして『奴隸制時代』（一九五六）『中国古代社会研究』（一九六〇年）も出版されている。

(二)

さてこれから本論の内容について述べよう。最初は「呂不韋と秦始皇帝の關係について」であるが、余英時の「互校記」に沿って述べると、錢穆は特別の考証によって、秦始皇が呂不韋の子であるという説（そのような伝説もあった）を否定し、また呂不韋が嫪毐を自分の身替りとしたという説も否定している。それと同時に呂不韋と始皇の間の政治上の衝突の可能性があることを指摘している。それら

の見解を郭沫若はほとんど剽窃し、文章は翻案して、自分の文のようにしていると。それだけでなくこの一節は『十批判書』の中でも最も重要なものであると。

一般の典籍、例えば『史記』や『戦国策』のような書物からの引用によるものは、誰でもが日頃から用いているものだから、引用する資料が同じでも剽窃とは決めがたいものがある。しかしこの部分の論断はそうではないと余英時は主張する。それを明らかに示しているのは、この論が、湯聘尹の『史稗』と王世貞の『読書後記』の両書からの引用によっているのであり、それを郭沫若もこの二書から引いている。このようなあまり知られていない書から引くのは、あまりにもうまく合致しすぎやしないかと余氏は言うが、それに対して翟・耿の二氏は、事実をはたしてそうかと言うのである。

この呂不韋、始皇・嫪毐に関して引用する資料は、『先秦諸子繫年』（後出の場合『繫年』と略す）の引く史料は二十余条。『十批判書』の引く文献もまた二十条に近い。ただ『十批判書』は郭氏の得意とする銅器の銘文（金文）をも引いて証としているが、両書の引くものの大半は、『史記』『呂氏春秋』『戦国策』の中からであって、余氏の「互校記」に言う一般的な書籍である。従って問題となるのは『史稗』と『読書後記』である。

そこで余英時氏は、「この二書は郭沫若が絶対に見ることの出来るものではない」（「互校記」の第一回目の発表時の言葉）という。というのは、これを郭氏が執筆していた時は、抗日戦線に参加していた時期であり、戦線を移動するような時に、このような『史稗』や『読書後記』を持っていたり、見る機会はなかったろうというわけで、『繫年』から剽窃したはずであると言うのである。

そこで翟・耿の二氏が、この二書について綿密に調査すると面白いことが見つかっている。まず『繫年』の引く王世貞の書は『読書後辨』なのに、余氏は誤って『読書後記』と述べている。ところで郭沫若の方は『読書後記』と書いているので、余氏は『十批判書』の方からとり出してきたものである。それはさておき、王世貞に『読書後辨』にしろ『読書後記』があるかという点、これが無いのである。翟・耿の二氏の調査によると、王世貞にあるのは『読書後』というもので、錢穆が『繫年』を書くに際して、この書を見ていないことが想像される。『繫年』の初版も増訂版も、ともに『読書後辨』であるところを見ると、印刷の際の植字工の誤植でないことも分る。

そこで翟・耿の二氏が清人の梁玉繩の『史記志疑』を査閲した時に、錢穆が『読書後』の原書を見ていないばかりか、王世貞のこの書名を知らなかったという十分な証拠を

持つに至ったという。二氏の説明によると、『繫年』の秦始皇と呂不韋・嫪毐に関する論述は大よそ『史記志疑』からの引用だという。ここに引く『史記』と『読書後』の材料は、皆『史記志疑』に見られるもので、それには「王世貞読書後辨之曰」とある文なのである。これは「王世貞『読書後』にこれを辨じて曰く」と読むのを、『読書後辨』という書名に採ってしまった。そしてこれでは読めないのので『繫年』には「辨」の下に「説」の字を補って、「これを説きて曰く」と続くようにしているのである。

ところでこれまでに述べてきたように、錢郭両氏とも、『史記志疑』をもとにしていることが分かったが、こう考えると郭氏は錢氏の『繫年』から剽窃したと言えないとも言えるというのが、翟・耿両氏の説である。というのは『史記』『読書後』は一般的に見かけられるものでないのに対し、『史記志疑』は、『史記』などを読む研究者にとって比較的ポピュラーなものである。郭氏も王世貞の『読書後』を知らなかったのだ、間違えて『読書後記』としたのは珍らしいものであったと言える。余英時氏も、『互校記』を書いた時、もっと詳しく『史記志疑』とその関係の参考書等を調べていたなら、このようなことにはならなかったであろう。

更に秦の始皇帝が呂不韋の子であるという伝説について、

『十批判書』と『先秦諸子繫年』に関する論争

湯聘尹は戦国時代の事を好む者が作ったのであろう（『史記』）と言い、王世貞は、一つには呂不韋が自分の地位を高く保つために故意に作ったためとし、もう一つには呂氏の門客が憤って、始皇は私生児だと罵り、世の中の人々に秦が六国より先に亡びることを知らせようとして作ったとする。これらの事に『繫年』は何ら問題にせず、究明してないのに対し、『十批判書』はこれらとは別に一つの推測を提示している。それは西漢の初年、呂后が位にあった頃、呂氏の一族の呂産や呂禄らの輩が、春申君と女環の故事を範として作ったのではないかと述べている。このような点について見ると、余氏が『十批判書』がすべて『繫年』によって論断しているとは言えるだろうか。

呂不韋と嫪毐との関係について、『繫年』は、当時の秦の朝廷と呂不韋との間には猜疑心があり、その間の衝突を防ぎたいという気持があって、史籍には詳しく書かれていない。始皇が幸にも先制攻撃し、嫪毐の事に関連することによって呂不韋は自殺し、呂門の賓客の或る者は誅殺されるか、追放されるかしたと述べるだけだが、『十批判書』は呂不韋と嫪毐の関係を比較的詳細に検討していて、そこには『繫年』とはいくつかの点について異なった点がある。一つに、呂不韋は、始皇が嫪毐を誅殺する時に協力していること。『史記』（秦始皇本紀）に嫪毐の反乱を始皇が平

定する所に「令相国昌平君昌文君発卒攻毒」とある文について、当時秦には左右の二人の相国が居て、そのうち呂不韋はまだ免職されていないのだから、昌文君とは文信侯（つまり呂不韋）の別号でなければならぬし、昌文君即ち呂不韋も始皇を助けて嫪毐を誅滅することに加担している。この点、『繫年』は、嫪毐の事に関係して呂不韋が自殺するのは大いに異なる所である。次に『繫年』では、嫪毐の誅滅と呂不韋の自殺を一緒にしているが、『十批判書』は、たとえ呂不韋が嫪毐と同じ仲間であったとしても、嫪氏が誅殺された後、どうして彼を宰相として容認して、一年後に宰相を罷免しただけにとどめたのだろうかという。第三点に嫪毐が誅殺された後、太后が始皇によって雍に移されたことについて、茅焦の始皇への説得について『繫年』は殆んど省略して述べていないが、『十批判書』は『説苑』（正諫篇）を引き、茅焦の話の小説家の筆法として信じることの出来ないものとしながらも、呂氏の野心などの推測に利用している。このように相異なる二書であるが、余英時氏は、これら二書は『戦国策』（魏策）を資料として引用したものと片づけているが、こうみてくると、どうして『十批判書』が『繫年』を剽窃していると言えようかと翟・耿両氏は批判し、これでは「这豈不是莫須有嗎（これでは捏造上げではないか）」と言っている。

この後、呂不韋と秦始皇帝の思想と政治的主張の対立について二書の相違についての検討があるが、『繫年』は『呂氏春秋』を資料として論じて、錢穆の呂不韋が始皇の政敵であることを述べたのは、清朝の学者姚文田の考証をもとにしている。その中の「其維秦八年之称」について、姚文田の説を「甚弁而核」と言い、呂不韋は始皇の紀元を用いなかったことに政敵の意を見い出しているが、郭沫若もこの問題について考証をしている。彼は金文の列国紀年の例から「維秦八年」は、秦の始皇の八年であることを定めたが、余氏は郭沫若のこうした考証による決定について何ら言及しないし、錢穆が賛同した姚文田の説についても述べていず、姚文田の考証までも自分の恩師である錢穆の名の下に帰していると翟・耿氏は批判している。

(三)

続いてこの論文は、(二)「関于前期法家」と(六)「関于稷下学派和其他諸子」の二項目についての論述が続く。順を追って概要を述べ、問題点を見ていきたい。

余英時の『互校記』が言うのに、『繫年』の中で「戦国の変法は商鞅に始まったのではなく、東方の変法が先にあり、西方がこの後を継ぎ、李悝・呉起が早く出て商君のために路を開いた。この李悝・呉起・商鞅が戦国初期の法家

で、韓非とは同列に論じられない人達である」と述べるのであるが、郭沫若の「前期法家批判」は全く錢穆の考えに拠っており、その中に列举されている思想家達もすべて『繫年』の考証の成果にもとづいていると余氏は言う。

ところで郭氏の「前期法家的批判」は一九四四年の一、二月の間に書かれたものであるが、彼はこれよりも以前に、李悝・呉起・商鞅がすでに法家思想の基本的な観点を備えていたことを、一九四二年の二月に発表した「屈原思想」（『屈原研究』一九四三年七月、初版刊所収）に発表している。この中で屈原の生きた時代を論じた文に「戦国時代になるや、魏の文侯の時、李克（李悝のこと）に地力を尽す教え有り。魏国をして富強にせしめ、其の詳は得て聞くべからず。その衣鉢を伝ふるものは呉起と商鞅なり。……この二人の革命的な政治家（呉起は兵家として有名だが、その実は政治に長じていたのである）は、悲劇的な最後を迎えるが、彼の法術を行なうか、行なわなかったかが、秦・楚の運命を決めたのである。秦国は商鞅の法を用いて天下を統合し、楚国は呉起の法を用いなかったので絶滅に終わった」（郭沫若^{*5}の日記によると一九四三年八月三十一日完成した「述呉起」の論文による）とあって、呉起が政治家であるとともに、商鞅と併称されていたことを指摘し、呉起の政治的な主張を列举した後、「これがだいたいに後に商鞅

の行った秦での政治上の方法であった。そして商鞅は呉起と同じ衛の人で、彼等は師弟関係にあったのかもしれない、少なくとも商鞅は呉起の精神の影響を受けていたのは全く問題のないことだ」と郭氏は言う。続けて呉起の法というのは、結果的には楚国では用いられなかったが、もしも呉起が楚国で政治的に安定した地位で、商鞅が秦でのように22年間も用いられたなら、たとい呉起が死んだとしても、法が施行されていたなら、秦国による統一を待つまでもなく、なされていただろう」とも述べる。郭沫若は「述呉起」を書く前に、「屈原思想」を書き、このような考えを持っていたと「前期法家的批判」の中で述べているのである。つまり「屈原思想」と「述呉起」の両文は、一九四三年九月七日、郭氏が杜国庠から『繫年』を借りる前に書いたものなのである。もしも余英時が、「屈原思想」で郭氏が、李悝・呉起・商鞅を併せて理解しているのを知っていたのなら、それは故意に『十批判書』が「述呉起」に書かれてあることをもとにしてゐるのを無視してゐるのであり、『十批判書』の「前期法家」の論述が『繫年』にもとづいていると立證しているのは、全くのこじつけであることが分ると翟・耿氏は言うのであり、これこそ事実を曲げるような、人として許されないことであると言っているのである。

余英時は「彼（郭氏を指す）が所謂前期法家の概念を明

らかにしているのは、錢先生の説いた「初期法家」である。この著書の不徳は人をいよいよ驚かすものがある」という。次に錢穆は「李悝・吳起・商鞅、乃ち戦国初期の法家に至つて」と述べているが、この「初期法家」の概念を明らかにして述べているわけではない。郭氏の使う「前期法家」の概念がどのようなもので、この両者はどう違っているのかも問題である。余氏は師錢穆の新しい見解として強調しようとするが、錢氏自身はそのような考えはなかったように思われるし、郭沫若とて李悝・吳起・商鞅らを前期法家とするものの、彼もそれを自分の新見解だとは考えていないのである。というのは彼らより前に、これら三人を一緒に論じている人は居たからで、例えば梁啓超の『先秦政治思想史』にはその点が論じられていることを翟・耿氏は指摘し、これまで述べてきたようなことを問題にするなら、錢氏とて梁啓超のような先人の研究成果を尊重していないのをどうして余英時は言わないのかということになる。

次に郭沫若が、この李悝・吳起・商鞅が儒家の子夏、所謂「子夏の儒」から出ているという説について、余英時は、これは錢穆の「魏文侯礼賢考」と「吳起去魏相楚考」、また「商鞅考」（すべて『先秦諸子繫年』所収）で論じたものを合せて作り上げたものだという。しかし郭沫若はこれらについては前述の「述吳起」の中ですでに詳細に論じて

おり、これはまた郭氏が『繫年』を借りて読む前に書いたものであることはすでに述べているので再述はしないが、この中で、郭氏は『韓非子』（説林上）を資料として証明に使うが、錢氏はこれは信ずるに足らずとする。従ってこの考証の結論は同じでないことは明らかである。それを余氏は、『十批判書』は『繫年』を剽窃したとするのは明らかに事実に反することである。このようなことは慎到についてにも言える。『十批判書』では、慎到と申不害は前期法家に入れてあり、彼等の思想は黄老学派に淵源すると述べているのだが、この資料として用いた今本の『慎子』について、『繫年』は偽書として信ずるに足らぬものとするのに対し、郭氏は慎到の思想を、この『慎子』の残余の輯本より分析しているのである。つまり今本の『慎子』に対する扱う態度も評価も異なるのである。また細かいことだが、余氏がこれだけ細かく『互校記』で両書を比較検討している中に、『繫年』が『荀子』（非十二子）を引用しているのを、誤って『莊子』（天下篇）としている文（「尚法而無法、下修而好作……」『荀子』（非十二子）が「慎到攷」にあるが、『十批判書』には正しく「荀子」（非十二子）からとして引き、『繫年』に於ては、初版も増訂版も誤ったままである。翟・耿氏は、余英時が厳しい対校の中で、このような点を見逃していることに疑問に感

じているのである。

また申不害に關していうなら、その観点はすでに梁啓超の『先秦政治思想史』に見られるものであり、その上郭氏は『韓非子』や『戦国策』からの引用文は『十批判書』の方が多いのである。そればかりでなく、『群書治要』に収められている『申子』（大体篇）や『呂氏春秋』の任教篇や慎勢篇は、『繫年』の方では全く資料として使われていないのである。

翟・耿氏の論文は、続いて(三)「関于稷下学派和其他諸子」という項で述べられる。ここの稷下の学問についての錢穆氏の「稷下通考」の考証は詳細で、学問的貢獻の大きいものである。特にこの論の依っている資料の『太平寰宇記』に引く劉向の『別録』の文や徐幹の『中論』（亡国篇）などは見るべきものがある。これを郭沫若が『繫年』から引用していることは確かで、その際、『太平御覽』と誤って写しているのは少々お粗末である。そのことについて翟・耿両氏は、郭氏の当時の状況を述べて弁解しているのである。つまり、抗戦期の重慶のような所で、このように巻数の多い書物を借覧することなど不可能なことで、従って引用に際して、余氏が指摘するように、出典などの注記をせず、出処を明らかにしていない点について余氏が責めるのを咎めることは出来ない。確かに余氏が言うように、この

錢穆の「稷下通考」は、先秦學術思想のキーポイントを証明したものであり、極めて新しい観点も出しているものである。しかし同じ資料を扱いながら、郭沫若は『稷下黄老学派批判』で、『繫年』が論及していないものを論じていることにも注目すべきである。「老子道德経」が環淵の書いたものであり、老子その書やその人について、晚く出たものである点、また『管子』の「心術篇」や「内業篇」が、稷下の道家宋鉞であったり、「白心篇」が尹文の著したものであるというものなどは、現代の先秦思想を研究する人々の認めるものでもある。また『青銅時代』に収める「老聃・関尹・環淵」と「宋鉞・尹文遺著考」などの稷下学派の研究は、錢穆氏の研究とは合わなかったり、論及していないものであることは、大いに評価すべきものである。そしてこれらが、余氏の言うように錢穆の考証を巧みに奪い去ったものだとは言えないことだと考えられる。

その他の諸子についても余氏は『十批判書』を剽窃したとして責め立てるが、『十批判書』と『繫年』は、同一資料をもとにしているものもあり、異なるものもあり、究め方が違ったり、観点が異なったりして、いろいろな方法がとられている。郭沫若は先秦諸子を研究する時に、近・現代の学者の著作を、その中には『先秦諸子繫年』も含めてであるが、いろいろ参考にしていることは確かである。そ

の上、抗戦時期の重慶で、国民党が政府機関を支配している時に、郭沫若のようなマルクス主義者は極力排斥されていたので、図書館から借り受けることは極めて困難であったことが想像される。従って他の人の作品を引用することや、他人の著作から原典に当って検討することは非常に困難であったことも理解してやらねばならないようである。

そのような中で、郭氏は自分がどのように研究してきたかは『十批判書』の後記の中で述べている。彼は、秦漢以前の材料について、自分が渉猟できる範囲にあるものは、力の及ぶかぎり準備をし、探し求めたと述べて、日記を披露しながら詳しく述べていることは、彼の当時の研究態度をよく表わしている。そこには他の人の研究を剽窃しようなどという心は全く伺えないように思う。「荀子批判」の中に、荀子の遊学の年を、『史記』や劉向の「叙録」に五十歳とあるのを『風俗通』（窮通篇）で十五に改めたのなどは、『繫年』もそのように改めているし、郭氏はそれを見たかもしれないが、これなどは梁啓超もそうしているし、姚永朴の『諸子考略』、晁公武の『郡齋讀書志』の考証を引いている。このように他の所においても先行研究の引用を、錢氏もふまえているし、郭氏もふまえているのであって、それを郭氏ばかりについて錢穆の剽窃だと余氏が責めるのは少々行き過ぎの感じがしないでもない。これまで

述べてきたように、余英時が『十批判書』を『繫年』の剽窃だと決めつけて責めている中に、不合理な点の多いのも確かである。

(四)

余英時氏が『互校記』で述べる点を、錢穆の『先秦諸子繫年』と郭沫若の『十批判書』を比較した結果、翟清福・耿清珩氏は、余氏の言は道理と根拠のない中傷だと言い、特に一人の学者が抄襲、つまり剽窃したという厳しい言葉を吐くことについて、これまでに例証したような点を考えるなら、軽率にも言うべき言葉でないとするのである。

この論文の「結末語」（結論）で、翟・耿両氏は、『繫年』と『十批判書』とは性質の異なる論著であるという。そしてそれぞれが先秦諸子の研究において、それぞれの観点や方法で大きな貢献をしている。そこには資料の操作、観点、方法に於て、的確か否か等の問題があることは確かで、それは論議し、批判すればよいのである。そして先輩学者の研究に対しては尊重することは大切だが、おだててはやすことだけはしていけないことである。批判、批評するのはいいが、その貢献を軽々しく抹殺すべきではない。そういう意味からすると、余氏の態度は学者としてすっきりしないものがある。つまり自分の恩師^{*}に対しての身びい

き、郭氏に対しての意図的な貶め、毒のある言葉による中傷などが感じられ、これは本当に正しい学者の態度とは思えないと言う。

遺憾なことに、『十批判書』と『繫年』を深く研究していない人にとっては、この『互校記』のようなものを読めば、その主張に喝采するだろう。そしてそこには余氏が郭氏に対する政治上の立場の違いから敵対している面があるようで、本当に人々を納得させるためには、政治的宣伝の要素があってはならないのである。『互校記』の本文を読むと、そこには学術という外衣を着て、その下には政治的感情が発散しているように思える。

というのは、一九九一年、余氏が「郭沫若抄襲錢穆先生著作考」を改めて『互校記』として発表した時、その跋語に、わざわざ次のような文を付けた。その中で「（本書の出版の）数年後、それと真向から対決するために白寿彝の『錢穆和考據學』が『歴史研究』上に発表された。この中で、『全編にわたって暴力的な言葉で錢穆の一切の著作を、特に考証学の著作に対し、一錢の価値もないと罵倒した』と言う。本当に白氏がそのような暴力的な発言をしているのかどうか分らないが、翟・耿両氏は、これこそ政治的に利用しているという。残念なことに、私は先秦諸子について専門でない上、ここにある『歴史研究』を目下持ち

合せておらず、検討することが出来ないが、一錢の価値もないというような暴力的発言と書いている所に、何となく扇情的意図的な言葉であることが感じられる。

ただ政治が絡むと異常な現象が起きることも確かである。郭沫若も、文化大革命に際しては、自分の過去の業績を、自己批判の中で全て破棄することを宣言しているし、馮友蘭も同様の行動をとり、そのようにしなければ生きていけない状況も、政治というものは作り出すのである。

それはさておき、これらを第三者として公平な観点から読む時、この両書にはそれぞれの欠点、それは本当に僅かの小さいものであると思うが、それらがあるうとこの両書はそれらを越えて偉大な業績であることは確かであり、今回、この二書を抄読してその思いを痛感した。

郭沫若は批判の対象とされ、痛棒をくらわされており、その点については確かに『繫年』を引用しながら、その注記なり、それを参考としながら、それについての記述がないのは問題としていいが、書かれた抗戦時代という状況や、従来の中国人の論著の方法が、学者個人の彪大な記憶蓄積に頼って書くというのがこれまでの習わしであったことを考える時、欧米のビブリオグラフィーの発達し、学問上の新見がどこにあるかと詳細に分析して論ずる欧米の、そして今日では当然とされる論文著述の方法は確立していなかつ

たのである。その上、戦乱で隔絶され、資料の入手もまなならない時には、仕方のない現象であつたろうと同情せざるを得ない。それが少しばかりあつたとて、これらの書を持つ本質的に偉大な業績という価値は変りないと思うのである。

現代はほんの僅かの新しい見解を争う。丁度、特許や発明を争って研究成果が問題とされるように、文系学問に於てもそれがなされる時代から考えれば、何とルーズな感じがするかと思われるが、それが当時の状況であり、この欠点をまた「他山の石」として、我々の研究上に銘記するこ

とで、この論争は意義があつたと思う次第である。

注1 羅義俊著「錢穆」（『現代新儒家人物与著作』南開大学出版社、一九九五年二月）P 150—154

2 自序に「余『諸子繫年』を草するに、民国十二年秋より始め、四、五載を積み、攷辨百六十篇を得て、三十萬言に垂んとす」とある。

3 『十批判書』の日本語訳、『中国古代の思想家たち』下巻、P 369—387。野原四郎・佐藤武敏・上原淳道訳。岩波書店刊。なお本書は上巻が一九五三年八月、第一刷。下巻は一九五七年七月、第一刷。上巻の巻末に原著の後記が訳出され、下巻の巻末の解説に郭沫若の業績の解説がある。

4 郭沫若の伝記は、平凡社の東洋文庫に、郭沫若自伝として、

(1)『私の幼年時代』、(2)『創造十年』、(3)『続創造十年』、(4)

『北代の途上で』他。(5)『続海濤集』他、(6)『抗日戦回想録』の六冊に描かれている。なお『十批判書』の「後記」にも簡略に描かれているが、これらは前半生である。

5 『十批判書』（一九五四年、人民出版社刊）後記、P 468。

「述異起」は『青銅時代』所収。なおこの文に付されている日付は、一九四三年九月十一日となっている。

6 同前掲書。P 469。杜国庠は金剛村の杜老と出ている。

7 「老聃・関尹・環淵」は、一九三四年十二月二十五日に書き、一九三五年四月の『新文学』に発表。のち一九四五年二月十九日に付記、そして『青銅時代』に収められた。「宋鉞尹文遺著考」は、一九四四年八月二十九日に書かれている。

8 余英時氏については前出の注1の『現代新儒家人物与著作』（方克立・鄭家棟 主編、南開大学出版社刊）に余新華の筆によって人物小伝と主要著作の紹介がある。（P 389—399）

原籍は安徽省潜山。一九三〇年生れ、香港新亞書院文史系の第一回卒業生で、ここで錢穆らに師事。後アメリカのハーバード大学で博士号を取得。ハーバード大、イエール大、香港中文大、新亞書院々長を経てプリンストン大学教授等を歴任。余氏の言に、大陸で広く流行している文化思潮の角度から新儒学を定義するなら、「我們也許可以称錢先生為新儒家」と言っている。なお余英時氏の『中国近世宗教倫理和商人精神』が森紀子氏によって訳されて『中国近世の宗教倫理と商人精神』として平凡社より刊行され、その巻末に島田虔次の解説があり、余英時氏の人と学問について述べられている。